

スポーツの実践事例に焦点を当てた研究論文を投稿する際のポイントについて

金谷麻理子
筑波大学体育系

キーワード: 実践現場, 研究者, 読者, 初回投稿時, 研究の位置づけ

1. これまでの査読論文の主な内容

本学会に入会以来, 専門分野である体操競技を中心に十数件の投稿論文の編集に関わってきました. 本稿はその経験に基づいて, 主にスポーツの実践事例に焦点を当てた研究論文を投稿する際のポイントについて述べたいと思います.

まず, これまでに関わってきた投稿論文の主な内容は以下に示す通りです.

- ・ 考察対象の人数:
1名, 2~3名, 10名未満, 1クラスなど
- ・ 考察対象の技能レベル:
初心者~全国トップレベル
- ・ 考察資料の収集期間:
数日, 半期, 約1年間, 数年間など
- ・ 研究課題:
スポーツ技術(新しい技術, 高難度の技術, 流行している技術, 基礎的な技術)の練習方法の開発, 技術情報の抽出, 技能の評価方法の開発, 指導方法の開発, 評価観点の明確化, トレーニング活動の分析など
- ・ 考察資料の種類:
指導者あるいは学習者(いずれも筆者を含む)によるトレーニングの記録, アンケートやインタビューの結果など

これらの内容は, 「競技スポーツや健康スポーツあるいは教養スポーツの現場における数多くの実践例を取り扱う」という本ジャーナルの「発刊の目的」に見合ったものであり, スポーツの現場で体験されている様々な活動に焦点が当てられたものであることから, ここでの成果はまさしく実践現場で問題解決に挑む指導者や選手にとって, 貴重な情報となり得ると考えられます.

2. よく見られる初回投稿時の問題点

次に, 初回投稿時に「B」もしくは「C」と判断される場合の問題点について述べたいと思います. というのも, 周知のことではありますが, スポーツの実践現場で得られた知見を研究成果として残していくためには, 単なる「体験記」ではなく, 学術論文としての成立させるための条件を満たす必要があるからです. 以下に, 初回投稿時に指摘されることが多い3つの問題点について, 確認しておきたいと思います.

- 1) 研究の位置づけが不明確
- 2) 論文構成に問題がある
- 3) 図表, 写真等が不明瞭

一つ目は、研究の位置づけについてです。一般的に「緒言」「はじめに」「研究の背景」などの項目で示される内容ですが、意外にも納得できる内容が記載されておらず「いまさら?」「なぜこれ?」と第一印象で思ってしまうことがあります。まずは読者に「今、なぜこの研究に取り組むのか」ということを伝える必要があります。なお、本ジャーナルを目にする読者はほとんどが各種目に精通する専門家であるため、ここでの記述内容が、現場で活用可能な知見であるか否かは、一目見るとわかるのではないのでしょうか。

二つ目に、論文構成についてです。いわゆる論文全体のつじつまがあっているかどうかということです。研究目的に見合った事例の場面設定と研究方法が用いられているか、またその研究方法によって導き出された結果が適切に分析されているか、さらには結果に対する考察が適切であるかなどが主な観点であり、学術論文として成立するか否かはこれらの点によって判断されるように思います。上記で「なるほど…たしかにこのことについて研究する必要がある」と読者が思ったとしても、今度は「なぜこの場面で、この人たちに着目?」「なぜこの方法?」というようにせつかく動き出したストーリーが迷走してしまっただけではいけません。また、論文の中で筆者が「伝えたい!」という思いがあまりに強い場合、記述内容が“主張ありき”で根拠が不明確なまま論が展開されてしまうこともあります。「言いたいことはわかるけど…」と、査読者としては苦心するところです。

そして、三つ目に図表、写真などの資料についてです。自身の考えを他者に伝えたいと思うとき、図表や写真、動画など目で見てわかる資料は大変有効なものであり、論文においても同様です。特に、私たちが主に研究対象とする人間の動き方や運動経過は言葉だけで表現するのは難しいため、これらの資料は不可欠なものです。また、論文の詳細を読む前に概要を把握しようとする際にも、「パッと見てわかる」という重要な役割を担っています。しかしながら、図表や写真が不鮮明である、連続写真で適切なカットが抜けているなど資料として不十分と思われるものや、他方で図表、写真はあっても説明が不十分で結果的に伝えたい内容がよくわからないという場合もあります。ちなみに、本ジャーナルは動画も認められていますが、動画入りの論文についてはまだ担当したことはありません。

以上、初回投稿時の論文でよく見受けられる問題点でした。これらはごく一般的な内容であり、客観的な立場で読むとすぐにわかるポイントです。しかしながら、自身の文章となるとなかなか冷静に分析できないということもあります。そのような意味で、査読者を含む他者に内容をチェックしてもらうことは、論文の質を高めるために不可欠な手続きであるといえます。

3. 論文を投稿する際のポイント:研究の位置づけを明確にすること

以下では、上記に挙げた問題点のうち、研究の位置づけを明確にすることについてもう少し掘り下げてみたいと思います。

このことについて、体操競技の技の研究を例に挙げると、世界で希少価値の高い新しい技を研究課題とする場合、その技を実際にやったことのある選手の運動感覚や習得に至った練習方法などは、そ

れだけでもその技を習得したい読者には有効な情報となりうるでしょう。一方、すでに多くの選手が習得しており、ある程度の練習方法も確立されている技である場合はどうでしょうか。これまでその技に取り組んだ先人たちが思いもよらなかった方法を発見するというのは、よほどのことがない限り難しいと考えられます。ここに研究の位置づけを明確にしなければならないという根拠が示されると思います。

スポーツの実践現場で生じていることを研究対象にしようとする場合、自身(もしくは指導する選手)が当該の技を習得あるいは習熟したい(させたい)がなかなかうまくいかず、しかし熟考と試行錯誤を重ねた結果、うまくいったのでそれを論文にまとめたい、という流れで研究が始まることが多いように思います。つまり、あらかじめ先行研究を検討した上で実験(実践)ではなく、すでに進行している実践現場が先にあって、その上で研究が始まるという状況かと思えます。このことは実践現場の問題に着目して研究を行う場合、よくあるパターンであり、このような研究の難しさのひとつであるとえます。

では、「いま、なぜ？」この研究なのかということを読者に理解させるには、どのようにしたらよいのでしょうか。それはその研究が、当該スポーツ種目の長年積み重ねられてきた発展過程において価値が認められるものなのか、また現時点で明らかになっている他の知見とどこが違うのか、というふたつの点を明確に示す必要があるということです(金子, 2009, p147-149)。

前者は、体操競技でいうと「技の承認、あるいは淘汰」が歴史的な共同性に関わっているという競技特性にかかわる内容です。その技の存在が多くの選手たちに承認され、後世に受け継がれていくものもあれば、一時的に脚光を浴びるが、その後価値が認められなくなっていつの間にか消えゆく技もあります。体操競技の技の発展には器具の発展と採点規則の改定が大きく関わっていますが、それらも含めて当該の技の背景にある、体操競技らしさともいえる、体操競技として相応しい運動経過やそのやり方であるかを検討し、価値が認められると判断されてはじめて研究対象となります。

そして、後者は類似の研究が数多くある中で、ここでの成果が新しい知見であるという根拠は何かを明確に示す必要があるということです。そしてこのことは、どのような対象者が、どのようなことを意図して、どのようなことを行ったら、どんな風になったというような内容を詳細に記すことで、オリジナリティを示すことができるのです。なぜなら、人間の運動には、人が変われば同じ運動でも異なる動き方が現れる、あるいは同じ人が同じ運動をおこなうにしても、行うごとに変化してくという「個別性の原理」と「発達の原理」が存在するからです(マイネル, 1981, p.146-147)。実践現場で生じていることをつぶさに描き出すことで、同様の悩みを持つ読者が問題解決の糸口を見出すことができるのではないのでしょうか。

したがって、研究の位置づけを明確にするということは、まず、今この論文を読むことによって、今同じような問題意識をもった多くの人に役立つか否かを確認します。そして、そうであると判断される場合には、考察対象者の特性や、有効とされる練習方法や分析方法を構想するに至った経緯、実際にそれを行って見たときの考察対象者の動き方の変化の様相、その学習過程で生じた問題点と解決策などを詳細にわたって記述することが重要であると思われます。それによって、読者がその研究の中の状況を想像でき、ここで提案されたことを取り入れてみようと思えばしめたものということになると思います。

4.まとめ

以上、これまで本研究誌の編集を担当してきた経験に基づいて、スポーツの実践事例に焦点を当てた研究をする際のポイントについて考えてみました。実践現場で発見したアイデアやその成果を残そ

うとすることは大変意義のあることです。スポーツの実践現場では日々、「できない」という現実と立ち向かっている選手や、その選手と向き合う指導者はかならず存在するからです。私たち研究者は、そのように取り組む実践現場に役立つ知見を提供し続けていく必要があります。

同時にこの活動は、実は一方通行でもいけません。研究成果を現場で活用するには、読者が独自の感性をもって研究成果を解釈し、「個性」や「発達」の原理に支配される現場に応用することが必要であり、そのことができてはじめて現場へ還元することができるからです。つまり、ここでの研究成果が有用なものとなるか否かは、研究者と読者の双方の能力にかかっているということです。また、実際に研究を始める際に関連する先行研究のすべてを検討する、つまり、類似の研究がどれほど行われているかを正確に把握することは極めて困難であると考えられます。なぜなら、学会誌への投稿論文のみならず修士論文を含めて、毎年かなりの数の研究が行われ、それらがすべて検索エンジンに該当してくるかというそうではないからです。したがって、この問題は学会を含め、研究領域全体で取り組むべき課題なのかも知れません。

おわりになりますが、本稿を執筆していてひとつ気が付いたことがあります。それはここで述べた内容は、まさしく自身が論文を投稿した際に査読者から指摘される内容であるということです。あらためてこのことを念頭におき、今後の研究活動に勤しんでいきたいと思っております。

文献

- ・ 金子明友(2009)スポーツ運動学. 明和出版
- ・ マイネル・クルト/金子明友訳(1981)スポーツ運動学. 大修館書店.